



園だより

文京区立第一幼稚園
令和3年度 2月号

URL <http://www.bunkyo-kyo.ed.jp/dai1-kg/>

よくみる よくきく ふれてみる

副園長 和島 千佳子

先日のプレイデーでは、5歳児はボール、4歳児は縄跳びを使った遊び、3歳児はふれあい遊びと、普段学級で楽しんでいる内容を取り上げ、体を動かして遊び、子供たちは保護者の方と一緒にいるのがとても嬉しい様子でした。保護者の皆様からは「楽しかった」「園の様子が分かった」「家でもやってみたい」「他の保護者の方と会えてよかった」等のご感想をいただきました。感染症対策のため、学級ごとに短時間で行いましたが、ご理解とご協力をありがとうございました。本日配布するチラシに、新聞紙を使った体を動かす遊びが載っています。ご家庭でもぜひ、時間をつくって楽しんでください。



年中組で自然観察会を行った時のことです。講師の山本正臣先生が、園庭のウメの木の幹やそこに生えているコケの様子を紹介してくださいました。順番に近付き、よく見て、コケの生えていない部分と触り比べると、子供たちから「ざらざら」「ふかふか」などと違いに気付いた言葉が聞かれます。すると、「よく見る目」になった子供たちは、隣の木の幹にも目がとまり、褐色透明の塊があるのに気付きました。友達と一緒に見ながら「何かな」「蜜なんじゃない?」「テントウムシ…の卵かな。だって、まあるくてつるつるとしててるから」と自分なりに思ったことを言葉にしています。先生は子供たちそれぞれの気付きを受け止めながら「ヤニ（傷を守るために木が自分で出している）」だと教えてくれました。よく見て気付き、なぜだろうと自分なりに考えて表すことの大切さ、そして、そばにいる人の自分とは違う気付きや考えに触れるからこそ、一人一人の考えが広がり深まることを実感したひとときでした。いつもの園庭もじっくり目を凝らし耳をすますと新しい発見があるのだと思いました。



年長組の箏の演奏会では、日本の調べを聴き、次に「園歌」「あおいそらにえをかこう」といった普段からなじみのある曲を箏の演奏で歌いました。喜々として歌ったあと、ある幼児が「一緒、だけど違うな」とポツリとつぶやきました。私はそれを聞いて、その幼児なりに箏の音色や日本の音階の特徴を感じとったからこそ言葉ではないかと思いました。演奏会後には体験の時間もあり、一人一人が箏爪をつけて弾いてみました。実際に箏という楽器を間近で見て、音を聴いて、自分でも弾いたことで、それぞれに感じ取ることがあったようです。講師の山木千賀先生に楽器の構造について熱心に質問する幼児や、「もう一回やってみたい」と終了後に担任にお願いしてもう一度体験のチャンスをもたらした幼児、「お着物がきれい、帯がかわいい」と和の装いへの憧れを感じている幼児もいました。



これらは、本園の特色である「運動遊びの工夫」「自然との触れ合い」「伝統文化との出会い」につながる体験として計画し、行いました。コロナ禍で一時的に制約が必要な中ではありますが、体を十分に動かすことや「みる」「きく」「さわる」などの身体諸感覚を通し実感を伴った直接体験は、人間の成長にとって大切です。とりわけ、幼児期は直接的・具体的な体験を通してこれからの人生の土台となる根をしっかりと張る時期です。今だからこそ、この時代に生きる幼児に育みたいことを捉え、感染症対策を講じながら、日々の体験や気付きを大切にしていきたいと思えます。